地上に琥珀をチラクラさせてゐるし、匂ひ物を匂はした女が、純白なパラソルの下で驕つたやうな表情をしながら、ぴらりしやらりと行くな。水玉のエールを襟から垂らしかけた若い夫人が乗つかつて居たから、あれも矢張、昨日あすこで出會した自働車か。

ハ、ア、其所で夜になる。其所で斯うして俺が車に乗る、走る、走る、疾く走る……

――一九一七、六、三――

十六になつたお京

水野仙子

慶應二年寅の正月を迎へてお京はたうとう十六になつた。幾らか下り氣味の眼にもつた愛嬌は、此頃益〻圓味を加へて來た白い頬の肉と共に、十六といふ華のやうな年に向つて微笑んでゐるやうだつた。その微笑に對して、その華のやうな年は何をもつてお京に答へようとするのだらう？　けれども彼女は自分に就ては何も知らない他の誰もの如く、否それにも增して何も知らなかつた。たゞ健かに美しく發育して行く自分の肉体と、それに伴つた嬉しいやうな悲しいやうな、遠いやうな近いやうな、つきつめられない仄かな或る情緒とより外には。

お京は奥州の某郡に、會津街道の通りを扼してゐるN館に、其處の問屋の二番娘として生れた。Nは水戸家より出た松平某寺の本領地で、高は一萬五千石ばかり、それに常州の領地一萬五千石を合せて都合三萬石となるのであつた。けれども某寺は江戸表住居で、Nにも常州の領地にも御陣屋だけが建てられ、常にお國詰めの代官が支配することになつてゐた。

お京の父親は其Nの郷士で、藤井治右衛門藤原義隆といつた。十二の年に孤子となつて伯父太左衛門夫妻の世話になつたが、よく其冷遇に堪えて艱難辛苦の揚句、終に二十歳で其家を再興した。負け嫌ひで世話好きで、物事に巧者な性質で、又敏活でもあつた。年の時に見込まれて問屋役を勤める事となり、其半官半民的な仕事をてきぱきと捌いて行つた。

嬪子の龜之助は當年廿二歳、母親似の内氣な物優しい性質で、体も生れ付き弱い方だつたけれど、又一方に父から享けた張りの強い氣で持ち其へて行つた。まだ無妻で家業の見習ひをしながら、古文學の書籍をいつも側から離さないやうにして居た。龜之助はお京を非常に可愛がつた。一体にお京は此家で唯一の被寵愛物だつたけれど――龜之助とお京の間にはもう一人の娘があつたのだけれど、それは小娘のうちに病死した――龜之助は常に女のやうな注意深さをもつて、妹を愛し護つた。

お京は花の常がたゞ其時を得て開いて行く事さへ知つて居ればそれですむやうに、のんびりと素直に育つて行くより外には、自分に就て何の用意も知識も要らなかつた。

お京には去年あたりからぼつ〳〵と縁談があつた。時の代官篠田傳之丞の嫡子に當る笠間庄左衛門は、取つて廿四歳の男盛りで、お京に懸想の餘り伯母を說き、伯母から伯父を說かせて遂に相當の中人を立て、貰ふ事にした。それは去年の秋の事で、中人は聖の如く一應藤井の家へ渡りをつけた。其時治右衛門は龜之助を呼んで此縁談についての意見を訊ねた。暫くして龜之助はたゞ一言、

「どうも……」と言ひ澁つた。

「うん、よし、まだ早いな。」と治右衛門は言つた。

話はそれなりになつて了つた。二人は別に其事に就て深く考へて見やうともしなかつた。まだ子供だとばかり思つてゐる譯でもないけれど、假令何處にでも、たゞ何となく遣り借しまれたのであつた。嬪子が虛弱故、娘は當分家にとゞめて置きたい考へといふ治右衛門の挨拶があつてから、餘り氣乘りのしなかつた中人は再度と問屋の閾を跨なかつたので、間もなく二人の念頭から其事は消えて了つた。唯しお京は何を知らう？

正月の二日の夜近くに、一人の小者が入つて來て上り框の所に狀箱を置いた。墨の色も匂やかに初春らしい氣分をそゝる歌留多會の案内で、それは毎年家中の一部の人達が巡回に催す娛みであつた。

お京は何をこも分らぬ嬉しい期待に胸をそわ〳〵させながら日暮を待つた。さうしてちよい〳〵八ケ間敷口を出すのに困りながらも、乳母に手傳はせて髮も自分から結ひ上げると、雜務を厭うて倉座敷に逼けてゐる病氣な母親の傍で、あれこれと若物を箱笥から出したり入れたりした。

躍込みの爐の火はあか〳〵と燃えて、松脂のあける焰に邊りは晝間のやうな明かるさ、正月早々の事とて宿りを頼る旅の者も無ければ、廣い家の中は常になくのんびりとした火が燃えてゐる。

「どう〳〵！」と時々馬を叱す聲が裏から聞えて、お湯を使はせてゐる音がほしや〳〵と寒い中を通して温かさうに聞えて來る。

「そら今日は御馳走だぞよ、馬にだつて正月があるわい、なあ青！」

若い頃馬に投げられて不具になりながら、今日の役目もこれで濟んだといふやうにどつこいしよと嬉傍に陣取つてさて例の濁酒を初めようとした時、下男の作藏が弓張を持つて蠟燭の火をつけに來た。

「嬢樣は今日は歌留多にござらつしやつたかの？」

「うむ、今夜は荒井樣がお宿だつつうで。」

お京はもう上り框に立つて、後から乳母が思ひ切り悪く袂を引張つて揃へてゐるのを待つて居た。

「それではお父さん、兄さん、行つて參じやす。」と帳場の方へお京は手を支へた。

「あ、よく氣を付けてな、先樣へ上つたらよく御挨拶を申上げるのだぞ。」と治右衛門は言つた。

お京は揃へてある下駄に白い足袋の先を乘せようとして俯向いた拍子に、八重菊の花瓣を持つた銀の簪が拔けてその脚を見せた。

「簪が落ちる……」と龜之助は其島田髷を眺めながら遠くから言つた。お京は襟許の裏袖の紅く羅はる兩手を擧げて、前よりは幾らか前髮寄りにそれを差替へた。

「嬢樣行つてお出なさりませ。作どん氣をつけて賴むぞい。」

乳母は、茶の摺み糸の縞格子のお召に、下着は折紙散しの羽二重の小紋形、繻色のふきを二枚重ねて、大きく龍紋を織り出した小緞子の帶をうつりよく矢の口にかめたお京が、弓張の灯影に

小作人　近藤浩筆

折しも歌聲が聞え出したので、お京は氣もそゞろに小走りして上り口に近よつた。彼女は、表口から裏口へ通じた中庭の光りの屈かぬ惡に、自分を認めて怜ら釘付けにされたやうに突つ立つた男の姿があるのに少しも氣が付かなかつた。

お京は内端に片足をかけた。

「お京さまー！」

それは叫ぶともつかず呼ぶともつかぬやうな、不思議に胸に透る響きをもつた聲であつた。何がなしハッとして振返るお京の目先に、

「御免！」と閃めいた刃、

「あッ！」と翳した手の先こゞ、眩しさを感じた眉間に何物かが輕く觸れた。

「御免！お後から參りますぞ！」

お京は其聲をはつきりと聞いた。再び振り翳された刃の下の恐怖に輝く彼女の眼は、其刹那の間にも係らず、熱く燃えて潤める二つの眼――それはお京が嘗て見た事もなければ味はつた事もない――に見入つた。其眼は彼女に、假令暫く得る間があつたにしたところで、それを與へはしなかつたであらう程の魅力を持つて居た。

たゞ其眼だけであつた。其眼より外にお京は何をも見ず、何をも知り得なかつた。彼女はばつたりと其場に倒れた。恰も枝を離れた落椿のやうに！

土を下への騷動の後で、漸く人々が知り得た總ては、額に美しくかすり疵を負ひ――それは銀の花簪が脫け出して彼女を第一の刃から救つたのだつた――左の肩先深く切り込まれた深手に氣に息絶えてゐるお京の傍に、今夜の歌留多會には「所用のため不參」といふ事になつてゐた笠間庄左衛門が俯向しになつて死んでゐた事であつた。彼は袴の上から下腹を刺して一文字に掻き切つてゐた。

仇なる情に伴はれて去つたお京の魂は、此世に於ける十六年の記念をその美しい骸に止めて、靜に靜に、彼女にと定められた道を旅立つて行つた。

貴婦人の眠（散文詩）

白鳥省吾

何となく眠い時だ、大地も眠する頃の眠たさを帶びてゐるやうに見える、樹の幹も潤んで輝かしい姿が覗き出す、草は可憐な庭園のやうに花をつける、